

氏名	佐藤千登勢 教授	
こんな研究をしています	20世紀初頭のロシア・アヴァンギャルド芸術を専門としています。とりわけ、ロシア・フォルマリズムの主導者ヴィクトル・シクロフスキイの芸術理論、小説、映画作品を中心に論文や本をまとめてきました。現在は、ロシア(ソ連)、中東欧諸国の映画を中心に作品分析を行っています。	
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・『DVDで愉しむロシアの映画』(東洋書店/ユーラシアブックレット、2005) ・『シクロフスキイ 規範の破壊者』(南雲堂フェニックス、2006) ・『映画に学ぶロシア語:台詞のある風景』(東洋書店、2009) ・「幾何学的フォルムの可能性:ヴィクトル・シクロフスキイの場合」、貝澤哉、野中進、中村唯史編著『再考 ロシア・フォルマリズム』(せりか書房、2012) ・「ロシア・東欧の映画人」17項目の概説、『岩波世界人名大辞典』二分冊(岩波書店、2013) ・「文芸映画」の項目概説、『ロシア文化事典』(丸善出版株式会社、2019) ・「映画『貴族の巣』に刻まれたウサーヂバ表象」『言語と文化』第21号(法政大学 言語・文化センター、2024) ・翻訳:タチヤナ・コトヴィチ『ロシア・アヴァンギャルド小百科』桑野隆 監訳(水声社、2008)のうち「アヴァンギャルド」「形式主義学派」「未来主義」など51項目 	
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・映画学 ・映像分析 ・文学作品分析 ・抑圧と被抑圧の諸相 	
こんな授業を行なっています	「多文化芸術論Ⅰ」にて、ソ連・ロシア、チェコ、ポーランド、ハンガリーの映画作品を対象として、国家のイデオロギーと芸術の関係について、また芸術の審美的要素について概観し、院生のみなさんと作品の一部を鑑賞しながら意見を交換する授業を行なっています。芸術テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性について考えることが目的となります。翌週までに、議論点や自身の見解を簡潔にまとめたリアクションペーパーを提出してもらいます。	
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・日本ロシア文学会の倫理委員会委員長を務めています。 ・慶應義塾大学通信教育部教科書『ロシア文学』金田一真澄 編著(2007 初版第1刷)の分担執筆。 ・『ロシア NIS 調査月報』(一般社団法人ロシア NIS 貿易会発行)にロシア映画のコラムを連載していました(2014年12月号～2020年8月号)。 ・放送大学東京多摩学習センターにて、「ロシアと中東欧の映画」に関する面接授業を行っています。 	